

「とやま賞」とは…

富山県の置県百年を記念し、富山県の将来を担う有為な人材の育成に資する目的をもって昭和59年に創設されました。

受賞対象者は、富山県出身者または県内在住者で、学術研究、科学技術・文化・芸術及びスポーツの分野において顕著な業績をあげ、かつ将来の活躍が期待される個人または団体です。

第40回

「とやま賞」贈呈式

令和5年5月22日(月)

贈呈式・受賞記念講演



石塚選考委員長による選考経過報告



新田知事より賞状・目録贈呈



第40回「とやま賞」贈呈式は、去る5月22日に、パレブラン高志会館にて執り行われました。

贈呈式では、新田富山県知事から受賞者5名に賞状及び奨励金目録が手渡されました。また、各受賞者からは受賞の喜びやこれまでの経緯についてプレゼンテーションしていただきました。



受賞記念講演

今回の受賞者

イメージング・再生・老化の研究技術を応用して失明を防ぐ



福田 慎一氏

筑波大学医学医療系眼科 准教授

学術研究部門 医薬分野(眼科学)

この度は、大変栄誉ある第40回とやま賞を賜り、誠にありがとうございます。

富山県ひとづくり財団ならびに関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

私は小杉町(現在の射水市)で生まれ、父の仕事について2年間ニューヨークで過ごした以外、富山高校を卒業するまで富山で育ちました。筑波大学を卒業してからは、眼科医として筑波大学附属病院で勤務しています。

私はこれまで20年近くOCT(光干渉断層計)の開発に携わってきました。OCTは、非接触かつ高精度に生体組織の断面を見ることが出来るイメージング装置で、眼科診療に必要な不可欠な機器と言えるまでになりました。私は、前眼部3次元OCTの臨床応用を世界で初めて報告、現在も瘢痕化や細胞機能を評価できる次世代型OCTの開発を行い、実用化を目指し研究を進めています。さらにイメージング技術を駆使し眼の老化の研究も行っており、Nature Medicine誌やScience Advances誌などに成果を報告しました。そして現在、これまでの研究

を融合させた「ダイレクトトリプログラミングを用いた網膜神経の再生」という新しいテーマに挑んでいます。今後も、この賞に恥じないようにさらに頑張りたいと思います。

最後に、昭和59年の第1回とやま賞受賞者の福田正治は私の父であります。親子での受賞は初めてとの事ですが、父はすぐくまじめな性格で、科学の発展を願って40年以上実直に脳の研究をただひたすら続けて来ました。そんな父の姿を見ていたのも、もしかしたら私が研究の道に進んだきっかけのひとつになっているのかもしれない。改めてここまで育ててくれた両親に感謝を伝えたいと思います。

学術研究部門 理工分野(有機・高分子材料科学)

大阪大学大学院工学研究科 講師



石割 文崇 氏

二次元性を有する有機・高分子物質の開発

栄誉あるとやま賞を頂き大変嬉しく存じます。私は、富山県富山市に生まれ、神明小学校、西部中学校、富山中部高校と、18年間に富山で過ごしました。その後、東京工業大学に進学して上京したのですが、富山の縁に引かれ、本賞の推薦者でもある高田十志和先生（立山町出身）の

研究室に所属しました。高田研究室では、知恵の輪の形をした分子など「作るのが難しいけれども面白い形をした、世界が驚くような分子を作る」という研究が行われており、幼少期に積み木やブロックなどで色々なものを作って遊ぶのが好きだったことが思い出され、童心に返った様に研究に取り組んだという記憶があります。博士課程終了後は福島孝典先生の研究室で分子の「集合体」で面白いものを作る研究に携わらせていただき、現在では物理化学が専門の佐伯昭紀先生の研究室で自由なもののづくりの研究をさせていただいています。これらの研究室で今回の受賞に繋がる二次元分子自己集合体やラダーポリマーの研究成果を挙げることができました。「科学の研究」と聞くと、真面目で堅苦しく、難しいことのように思われるかもしれませんが、実際はまるで「遊び」のようなとても楽しいものです。後に、山村正樹先生（第35回とやま賞受賞者）から耳にした話ですが、高田先生は、「石割は水を得た魚のように実験していた」と言っておられたそうです。AI技術の台頭などで複雑性が加速した現在の世界では、一体何が正解なのか誰も分かりません。そのような中で大切になるのは、学校で成績を収めるための勉強よりもむしろ、人それぞれが心の底から楽しめる「遊び」の力だと思っています。特に若いみなさんには、自分は本当は何がしたい（楽しい）のかを忘れることなく成長し、アーティストやスポーツ選手が心から楽しんで取り組むように、自分の好き

なことに熱中して世界を変えて行ってくれる事を切に願っています。私が熱中したまま研究を続け、本賞を受賞できたのも、家族や多くの共同研究者に支えられてのものであり、この場を借りて皆様に感謝申し上げます。心より、本当にありがとうございました。

学術研究部門 人文社会分野(社会疫学・学校保健)

富山大学地域連携推進機構地域医療・保健支援部門 副部門長 准教授



山田 正明 氏

子どものネット依存研究と結果に基づく健康教育(Evidence-based Education)の実践

この度は名誉あるとやま賞を頂き感謝申し上げます。富山県ひとづくり財団ならびに関係者の皆様にお礼申し上げます。私は滋賀県の自然豊かな地域で育ち、18歳で富山医科薬科大学（現富山大学）に入学しました。大学がある杉谷地区も自然豊かなところで、カエルの合唱で心が癒されていました。

大学卒業後は大学病院や市中の病院（市民病院や日赤など）で12年間勤務し、消化器内科医であったためアルコール依存の末期の患者さんをよく担当していました。その経験から日々の生活習慣の重要性を実感し、現在私が所属する講座で「子どもの生活習慣病」についての研究を始めました。当初の研究テーマは

「子どもの生活習慣とうんこの関係」でした。しかし高岡市内の小学校との連携事業（平成24年度、文科省スーパー食育スクール事業）で、養護教諭の方からうんこよりも「ネット依存」に関する研究を切望され、急遽研究テーマを変更しました。これが私がネット依存の研究を始めた理由です。アルコール依存の治療経験はありましたがネット依存は詳しくなく、独学で調べたり国内で先導的機関である久里浜医療センターに何度も研修に行ったりして知識を増やし、自身の疫学研究に取り入れました。これらの苦労の末、子どものネット依存の予防には「親のネット時間を減らせ」という結果を数量的に示すことができました。このエビデンスには多くの教育・医療関係者から注目が集まり、年間30から40回の招待講演を受けるようになっていきます。

現在様々な分野でデジタル化が進められていますが、医学研究ではデジタル機器による学習効率の低下（Screen inferiority）や脳の低活動や萎縮といった負の結果が報告されています。私は今後も健康に関する研究に励み、子どものネット依存を減らす活動に尽力する所存です。

最後になりましたが私の研究を最初から御指導を頂きました関根道教授（富山大学医学部長）、ならびに疫学調査に参加して頂いた県内の児童、保護者の方に深く御礼申し上げます。

文化・芸術部門

オペラ

サン・カルロ劇場



栗原 峻希 氏

オペラの国際的な活動及び各種コンクール等の受賞

この度、このように栄えある「とやま賞」を頂戴し、大変光栄に思います。射水市の田んぼの真ん中に生まれ育った僕が、今こうやってイタリア三大歌劇場である、ナポリのサン・カルロ歌劇場で歌う事ができるのも、やはり富山の懐の深さ、豊かな環境があったからだと思います。小杉小学校、小杉中学校と剣道を続け精神面の強さを培い、呉羽高校では日々音楽を身近に感じ、音楽と共に生きていく事の可能性を自分の中で感じました。恩師の黒崎隆憲先生、内山太一先生のご指導により道が開けて、東京芸術大学に入学する事ができました。

藝大では、福島明也先生という、それは恐ろしい先生に師事をして、そこで剣道で鍛えられた精神面がまず生かされました。あとから分かったのですが、全然関係のないと思っていた剣道も、重心の感覚や、丹田に集中する感覚など、歌に重要な要素がとても詰まっている事に気が付きました。藝大の院、オペラ科を経て、文化庁の新進芸術家海外研修生として、またローム・ミュージック・ファン

デーションの奨学生としてイタリアに留学し、シェリル・ミルンズ、チェチーリア・バルトリ、レナータ・スコット、マリエッラ・デヴィーアなど世界の様々な著名な歌手達と交流してきました。

ナポリは僕に沢山の事を与えてくれましたが、この土地の居心地がいいのもまた、海があり近くに山があり、どこか富山と似ている事があるのかもしれない。ここで今経験している事を宝物にし、また今後の歌手人生を歩んでいきたいと思っています。そして、今回この頂いた「とやま賞」に感謝し、富山を代表する、さらには世界的な歌手になれるように頑張ります。近いうちに是非、直接皆様とコンサート会場でお会いできる日を楽しみにしております。

スポーツ部門

スケートボード

台サキスポーツ／学校法人藤園学園富山高등학교



中山 楓奈 氏

第32回オリンピック競技大会(東京2020)におけるスケートボード競技女子ストリートで銅メダルを獲得

私が小学校3年生の時、富山県にスケートパークができました。私の父はスケートボードの経験者で、父から「スケートパークでスケートボードを始めてみればどうか」と勧められ、挑戦することに決めました。スケートボードはそれ

までしたことはありませんでしたが、体験してみるととても楽しく、最初のうちは遊び感覚でしていました。始めてから2ヶ月後に自分のスケートボードを父に買ってもらい、もつと上手になりたいと思うようになり、本格的に練習に励むようになりました。小学校4年生のときに中部地区での大会があり、この大会が私にとってのデビュー戦となりました。そしてその大会で優勝することができ、もつと競技力をのばしたいという気持ちが強くなり、それまで以上に練習に取り組みようになったのです。その結果、中学2年生の時に強化指定選手となり、SLSロンドン大会に出場し6位の成績を収めました。

2020年の東京オリンピックではコロナの影響で1年間延期することが決定し、オリンピックの出場権は持ち越しとなりました。私は高校生になり、富山県内にある龍谷富山高等学校への入学を決め、継続して東京オリンピックの出場権を獲得できるよう、毎日放課後に練習に励みました。6月のローマ大会では決勝に出場することができ、6位に入賞したことから東京オリンピックへの出場が決定しました。7月下旬から行われた東京オリンピックでは、大変プレッシャーもありましたが、私の得意技であるフロントサイドKグラインドを多くの人たちに観てほしいという気持ちを持って全力で滑りました。滑り終わったときには、やりきったという気持ちが強くなり、大変達成感がありました。順位はあまり気にして

いませんでした。3位「銅メダル」を獲得し、喜びでいっぱいになりました。大会後、地元富山県に帰ってきた際には学校の先生方をはじめ、富山県の多くの人たちが私のことを祝福してくださり、次はより上を目指したいという思いが強くなりました。高校2年生の6月にローマ大会で優勝することができ、世界ランキング1位になりました。現在私は、来年開催されるパリオリンピック出場を目指して毎日練習に励んでいます。パリオリンピックでは、優勝して金メダルを獲得したいです。

